

# ミヤマアカネ Q&A

Q1:ミヤマアカネは何の仲間ですか。

A1:トンボ科アカネ属でナツアカネやアキアカネなどアカトンボの仲間です。

Q2:日本の生息地はどこですか。

A2:北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・九州本土。

Q3:九州の生息地はどこですか。また、どれくらいいるのですか。

A3:

佐賀県:とても少ない

福岡県:多くない。

大分県:山地にふつう。

宮崎県:多くない。

鹿児島県:少ない

熊本県:天草と県北部をのぞきふつう。

長崎県:現在の主な生息地は世知原町開作。

1995年ころまでは、松浦市笛吹にも生息地がありましたが、笛吹ダムを造ったことで生息地がなくなり絶滅しました。

Q4:ミヤマアカネの一生とはどのようなものですか。

A4:世知原町で分かっていること

ふ化(卵からかえる)

夏から秋にかけて田んぼに産みつけられた卵は冬をこし、190日ほど(半年)でふ化します。田んぼに水を入れた後の代かきころにふ化すると思われます。

幼虫(ヤゴ)のすむ場所

水がゆるやかに流れている田んぼ(流水域)。

羽化(ヤゴが脱皮をしてトンボになる)

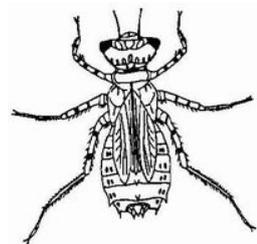
毎年7月15日ころから羽化が始まります。

成体(ミヤマアカネ)がすむ場所

田んぼの中や田んぼの周辺の草地。

天敵(ミヤマアカネを捕らえて食べるもの)

クモ類(ナガコガネグモが多い)・シオカラトンボ・ムシヒキアブなどがいます。



<ミヤマアカネの幼虫>

繁殖(卵を産む)

毎年8月15日ころから産卵が始まり、9月の終わり頃まで続きます。

産卵は水がゆるやかに流れている田んぼの水口(水が入ってくる場所)近くで、尾部(尾の先)で水をつつくようにしてします。これを打水産卵といいます。稲刈りの後などで水が無いところでは泥に産卵します(打泥産卵)

Q5: 生きている期間、数、飛んで行く距離がどうして分かるのですか。

A5: はねにマークをつけ(マーキング)しています。去年は750匹にマークを付けました。マークの位置や色で分かるようにしています。



< マーキング >

Q6: ミヤマアカネほご田んぼではミヤマアカネがどれくらい生まれていますか。

A6: 700~1000匹くらいだと思います(マーキングの結果)。

Q7: 成体(ミヤマアカネ)はどれくらいの間生きていますか。

A7: これまでの最長記録は67日間です(マーキングの結果)。

Q8: ミヤマアカネはどれくらい離れたところまで飛んで行きますか。

A8: 兵庫県宝塚市の調査では13kmですが、世知原では500mほどです(マーキングの結果)。

Q9: 田んぼがいっぱいあるのに、どうしてミヤマアカネは決まった田んぼにしかないのですか。

A9: 今までにわかったこと。

ミヤマアカネがすんでいるのはほとんどが棚田(だんだん畑)です。棚田は昔し人が手で作った田んぼです。圃場整備(ブルドーザーなどの機械を使って棚田を広い田んぼにすること)が行われていないので、田んぼの底がやわらかく水がもれることが多いのです。このため、田んぼにいつも水を入れ続けなければなりません。そうすると田んぼの中で水がいつも動いていることになります。ミヤマアカネはアカトンボの仲間ではめずらしく幼虫が水の流れる場所にすんでいます。これを流水域のトンボといいます。

棚田に水を入れるときは上の田んぼから順に下の田んぼへ水路を使って入れます。このとき、水の流れが見えます(圃場整備がすんだ田んぼではパイプを使うことが多いので水の流れが見えません)。ここが産卵場所としてとても大切な場所なのです。



< 水の流れが見える >

世知原町の標高の高いところ(300m以上)では、溜池がなく川の水を直接使っています。川の水は冷たいので、田んぼに水が入ってくる水口では稲が良く育たないので、水面の見える場所ができます。この場所が主にミヤマアカネの産卵場所となっています。

ミヤマアカネはあまり遠くへ移動しないのでなかなか、<sup>せいそくばしょ</sup>生息場所が広がりません。

**Q10:ミヤマアカネはどうして減少しているのですかですか。**

A10:いろいろな理由があります。

農家の方が<sup>こうれい</sup>高齢になり、手入れが大変な<sup>たなだ</sup>棚田が作られなくなった。  
(<sup>きゅうこうでん</sup>休耕田)。

田んぼで米以外のものを作るようになった(<sup>てんまく</sup>転作)。

コメの作り方が変わって、田んぼから何度も水をぬいて干すようになった(<sup>かんだんかんすい</sup>間断冠水)。このような田んぼではオタマジャクシも育たないので、カエルもおすすめせん。

米の<sup>しゅうかく</sup>収穫(刈り取り)がコンバインに変わった。コンバインからでたワラくずを燃やすので、田んぼに産み付けられた卵は死んでしまいます。稲刈りのすんだ田んぼに卵をばらまくナツアカネやアキアカネの卵も死んでしまいます。

<sup>ほじょうせいび</sup>圃場整備が終わった田んぼは水がほとんどもれないので、<sup>しすいいき</sup>止水域(田んぼの中で水が動かない)となり、幼虫(ヤゴ)がすめなくなった。(シオカラトンボ・ウスバキトンボなどは止水域のトンボです)。



< 田んぼが牛の<sup>ほうぼくち</sup>放牧地に >

**Q11: <sup>のうやく</sup>農薬でミヤマアカネは死なないのですか。**

A11: 農薬によっては死にます。昔は今よりも<sup>どくせい</sup>毒性が強い農薬を使っていましたが、ミヤマアカネは最近になって急に数が減っています。それは、Q10 で書いた通りです。

ミヤマアカネはいつも田んぼで見られるので、生まれてから死ぬまで田んぼにいたいと思いますが、あまり遠くへは行かないものの、田んぼの近くの草むらなどで過ごしているものがたくさんいます。

農薬をまいたとき田んぼにいたものは死にますが、草むらにいて農薬の<sup>えいきょう</sup>影響を受けなかったものが、田んぼに戻って産卵をするのでこれまで生きてきたのでしょう。

**Q12: どのようにしたらミヤマアカネを<sup>ぜつめつ</sup>絶滅からまもれますか。**

A12:

幼虫の<sup>せいそくばしょ</sup>生息場所を作る(田んぼの中に水の流れる部分を作る)。

狭くても良いから、水口に稲の無い部分をつくる(<sup>さんらんばしょ</sup>産卵場所を作る)。

コンバインで<sup>しゅうかくご</sup>収穫後のわらくずを燃やさない(特に水口付近では燃やさない)。

<sup>かんだんかんすい</sup>間断灌水をする場合でも水口の一部に水たまりや湿った場所を残す工夫をする(湿っていれば短い<sup>まじかん</sup>期間ならばヤゴは生きている)。



< このように水の流れる部分を作って常に水を流す >

2012.8.15 川内野善治